

現代畸聞録 怪異物語



真夏の夜に怪談はいかが？ 現代的ながらノスタルジックな新しいホラー

『現代畸聞録 怪異物語』は、メルマガで怪談を毎週発表し続ける猿田悠のモダンホラーを、海外でも有名なマットアーティストの木村俊幸が画ニメ化したものだ。

メルマガというメディアの特性からショートショートになっている原作にあわせて、合計6本の恐い話を収録。いずれも木村の作画・演出ながらその作風は微妙に異なり、バラエティーに富んでいる。

木村の本業であるマットアート(マットペインティング)とは、映画の特殊撮影用に背景に使う手描きの絵のことだ。現実にはありえない幻想的な光景を表現したいときや、様々な問題からセットを組むのが困難なときなど、マットアートの出番は多い。

最近ではCGの発達にもないデジタルマットペインティングが使われることが多いが、熟練のマットペインターとして木村俊幸の活躍の場は広がるばかりだ。

本作では作画だけでなく監督に挑戦した木村だが、デジタル紙芝居ともいえる画ニメの特徴を活かして、画家ならではの演出が冴え渡っている。以下、一篇ごとに見所をチェックしてみよう。

冒頭の「冷蔵庫」は全体の第一印象を決定づける重要な役割を担う。重厚な絵と不気味な音、そこにかぶさる「もうーいーかい?」「まだだよ」という無邪気な子供の声は、これから始まるであろう惨劇を十分に予感させてくれる。



前の物語が終わったともつかないうちに続けて始まる「ダルマ」、「冷蔵庫」にも言えることだが、作画のクオリティーが高いのに驚かされる。「冷蔵庫」が普通のダイアログであったのに対して、「ダルマ」はナレーション形式と、変化がつけられている。

ちなみに、ホラーの演出には2種類ある。スプラッターのように、刺激的な絵で観客の生理に訴える方法と、何も見せないことにより、観客の心理を捉える方法だ。「冷蔵庫」と「ダルマ」は、極力、登場人物を描かないなど、象徴的な絵で視聴者の想像力を刺激しているが、「夜の橋」は前の2編と異なり積極的に人物を描き、カットバックや音の断絶など、神経に直接訴える手段で恐怖を表現している。

次の「踏み切り」は短編であるが話がよくできていて、どこかで聞き覚えがある気もするので、都市伝説としても流布しているのだろう。写真のような

絵と、女の子の顔が怖い。

一転「米軍払い下げ」はコミカルなタッチの絵と音楽で和ませてくれる。話自体も、恐怖というよりはユーモアがあって、ラストの物語へ向けてのプレイク感がある。それにしても、様々なテイストの絵を描きかける木村の手腕には脱帽する。マッチ箱の装幀もかわいい。

最後の「友達が欲しい」は、人情話の趣があり、正統派の怪談といえるストーリーだ。相変わらずの緻密な絵だが、冒頭の2編では徹底的に人物の表情を避けることで恐怖を醸し出していたのに対して、ここでは顔が重要な要素になっているようだ。

